

# 一本薔薇



須賀敏子



1  
1999 ~ 2004



白  
き  
嶺  
シ  
ャ  
ク  
ナ  
ゲ  
の  
赤  
ネ  
パ  
ー  
ル  
は



雪  
解  
け  
の  
川  
を  
渡  
り  
て  
栗  
駒  
へ

ど  
く  
だ  
み  
の  
花  
を  
踏  
み  
分  
け  
検  
針  
す



この国はウランも菊もバケツの中

霧の彼方女人結界何故に



山  
笑  
ふ  
ザ  
ツ  
ク  
新  
た  
に  
求  
め  
た  
り

車  
窓  
よ  
り  
リ  
ヴ  
ェ  
エ  
ラ  
の  
街  
ミ  
モ  
ザ  
咲  
く



子の帰り待つ夜静かに雪積もる

避難小屋満天の星 i モード



狺  
犬  
の  
吠  
え  
て  
間  
も  
な  
く  
銃  
二  
発

初  
詣  
篝  
火  
の  
中  
す  
す  
み  
を  
り



新世紀バブルの日々は伝説に

ゆったりと霞の上の武甲山



梅雨の入りトロトロとマーメイド

なぜかしら紫が好き単帯



御  
嶽  
や  
金  
剛  
杖  
の  
鈴  
涼  
し

九  
輪  
草  
マ  
ウ  
ン  
テ  
ン  
バ  
イ  
ク  
行  
き  
去  
り  
ぬ



紐  
育  
紐  
育  
よ  
あ  
の  
秋  
の  
空

姫  
神  
の  
頂  
か  
ら  
の  
稲  
田  
道



宰相は一年ごとかうすら寒

谷川岳ゴンドラからの薄紅葉



篝  
火  
や  
竜  
の  
形  
の  
注  
連  
飾

卷  
織  
の  
湯  
気  
の  
向  
う  
の  
カ  
ン  
ダ  
ハ  
ル



初  
旅  
は  
三  
方  
五  
湖  
な  
り  
風  
の  
中

ポ  
ン  
ポ  
ン  
と  
空  
に  
向  
か  
つ  
て  
花  
八  
手



い  
や  
は  
や  
男  
の  
涙  
か  
菜  
飯  
食  
ふ

一  
族  
の  
無  
事  
を  
届  
け  
て  
伊  
予  
蜜  
柑



鈴  
蘭  
の  
四  
五  
本  
咲  
け  
り  
嫁  
ぐ  
朝

ア  
ス  
フ  
ア  
ル  
ト  
の  
隙  
間  
に  
咲  
き  
し  
董  
か  
な



揺れている熊野古道の鴨足草

雨止まず古茶たつぷりと淹れにけり



梅雨空を突き抜けて来しバンクーバー

万緑や牛馬童子の小さき像



夏  
燕  
常  
念  
岳  
の  
頂  
で

たんぽぽの花がグルメのブラックベアー



七  
月  
の  
ガ  
ラ  
ス  
色  
し  
た  
梓  
川

焼  
岳  
の  
そ  
の  
上  
の  
上  
雲  
の  
峰



黄金の稲穂の波や那須連山

妹よ栗の実落つる音がする



大根洗ふ小田和正を聴きながら

落葉踏む十八人のシンフォニー



ヘルパーの仕事始めはボタン付け

大不況鴨汁鰻 鮎食べてをり



白梅や芙美子の墓を探しをり

房総の巖峨山総て水仙花



春  
愁  
や  
臓  
器  
の  
中  
に  
隠  
し  
ご  
と

春  
一  
番  
反  
戦  
の  
声  
届  
け  
て  
よ



満  
月  
や  
桃  
の  
花  
咲  
く  
里  
の  
上

そ  
の  
道  
は  
枝  
垂  
桜  
に  
続  
き  
ま  
す



憂きことのある日無き日の新茶かな

百万本いいえ一本の薔薇でいい



畦  
道  
に  
刈  
残  
さ  
れ  
し  
蛇  
苺

雨  
近  
し  
銀  
竜  
草  
の  
道  
急  
ぐ



夏座布団膝を崩せし母の居間

アフガンの少女の涙額の花



魂  
祭  
歌  
舞  
伎  
役  
者  
の  
手  
の  
白  
さ

初  
恋  
や  
掬  
ひ  
損  
ね  
し  
金  
魚  
か  
な



肩  
越  
し  
に  
蓼  
の  
花  
散  
る  
万  
座  
の  
湯

野  
良  
猫  
の  
後  
ろ  
姿  
や  
赤  
の  
ま  
ま



平ヶ岳行けども行けども紅葉なり

きちきちや猫ゆつくりと通り過ぎ



大根煮る国会中継聴きながら

山下りて秩父夜祭肩越しに



年  
新  
た  
男  
た  
ち  
よ  
戦  
す  
る  
な

ロ  
ボ  
ツ  
ト  
の  
踊  
る  
を  
見  
た  
り  
神  
迎



日  
盛  
や  
氷  
河  
崩  
れ  
る  
音  
響  
く

一  
月  
の  
サ  
ザ  
ン  
ク  
ロ  
ス  
を  
見  
上  
げ  
を  
り



寒  
卵  
母  
の  
目  
差  
父  
の  
声

青  
岬  
重  
なり  
合  
つ  
つ  
て  
ミ  
ル  
フ  
ォ  
ー  
ド



車窓より紅梅しかと見つけたり

千代田区の梅に鶯見つけたり



春待つやライトに浮かぶ白川郷

春浅し白き化粧の道祖神



足裏のしつとりとして柿若葉

夜明け待つ鈴蘭の白子の産まる



混沌の世に生まれけり梅雨の蝶

木洩日を受けて広がる一葉草



石楠花  
一歩  
一歩  
をた  
たの  
しめ  
り

夜  
の  
明  
け  
て  
車  
窓  
次  
々  
植  
田  
か  
な



稲妻や宝剣岳の岩峯に

お月さまに手を伸ばす子や合歡の花



意地悪をされてるやうな秋暑し

赤まんま泣いては駄目よ女でしょ



祖  
国  
に  
は  
憲  
法  
九  
条  
柿  
熟  
る

長  
泣  
き  
の  
嬰  
の  
寝  
入  
り  
し  
や  
虫  
す  
だ  
く



紅  
葉  
の  
火  
打  
山  
よ  
り  
日  
本  
海

山  
栗  
の  
そ  
の  
ち  
い  
さ  
き  
を  
好  
み  
け  
り





2

2005 ~ 2007

孤島に立つ白き灯台石露の花



白足袋を求めたる日は昭和なり

しまひ湯の頃には柚子もやはらかに



は  
や  
三  
日  
干  
し  
物  
越  
に  
富  
士  
の  
山

初  
水  
天  
宮  
盥  
で  
鯉  
が  
売  
ら  
れ  
て  
る



道  
な  
ら  
ぬ  
恋  
は  
捨  
て  
よ  
と  
ビ  
ル  
風

竜  
の  
玉  
ふ  
ら  
こ  
こ  
の  
板  
外  
れ  
て  
る



日脚伸ぶ母の残せし帯ほどく

玄関にファーストシューズ春を待つ



そ  
よ  
そ  
よ  
と  
白  
き  
漣  
節  
分  
草

春  
疾  
風  
胸  
中  
深  
く  
原  
野  
あ  
り



甘茶飲む太き梁ある庫裏にゐて

全身で抱けとせがむ子風光る



出迎の若葉マークに夏つばめ

柿若葉路面電車は窓開けて



逆  
ら  
は  
ず  
従  
ひ  
も  
せ  
ず  
あ  
つ  
ぱ  
つ  
ぱ

郭  
公  
や  
二  
両  
編  
成  
宗  
谷  
線

緑陰にパンダは何時もねむそうに

すぎでしたなんて今更さくらんぼ



大  
瀑  
布  
世  
界  
遺  
産  
は  
人  
の  
波

茉  
莉  
花  
茶  
新  
茶  
で  
す  
か  
と  
字  
で  
問  
答



新涼や一駅歩く気にさせる

はじめての街に七夕飾りあり



大久保やオモニの店の唐辛子

大いなる聖<sup>ひじり</sup>岳<sup>り</sup>に立てり夏の果



群  
稻  
棒  
村  
の  
外  
れ  
に  
戦  
の  
碑

迷  
ひ  
道  
掌  
に  
一  
杯  
の  
鬼  
胡  
桃



男体山ふもとの紅葉知らぬげに

意地なんて軽くていいの濁酒



冬  
暖  
か  
暦  
届  
ける  
仕  
事  
あ  
り

風  
花  
の  
舞  
ふ  
竜  
ヶ  
岳  
富  
士  
間  
近



軍隊を持たぬ国在り初飛行

芭蕉翁浴みし鮮湖湯十一月



凍星を隠してオーロラ拡がりぬ

初旅や地球の割れ目  
在る国へ



五年間元気でいよと日記買ふ

江戸つ子や葱たつぷりとどぜう喰ふ



長  
旅  
の  
終  
り  
荒  
川  
小  
白  
鳥

旧  
姓  
に  
戻  
り  
し  
人  
よ  
ミ  
モ  
ザ  
咲  
く



風  
光  
る  
猫  
の  
写  
真  
の  
展  
覧  
会

ハ  
ン  
タ  
ー  
と  
二  
言  
三  
言  
シ  
ダ  
ン  
ゴ  
山



静  
か  
な  
る  
列  
に  
並  
び  
て  
桜  
餅

掃  
き  
寄  
せ  
て  
根  
元  
明  
る  
し  
落  
椿



みどりの日サラブレッドは鞭打たれ

ふと触れし乳房つめたし春の風



九重より由布岳までの夏霞

祖母山という名優しき夏の風



オ  
ホ  
ー  
ツ  
ク  
の  
風  
輝  
き  
て  
野  
萱  
草

四  
方  
よ  
り  
郭  
公  
の  
声  
坊  
ガ  
ツ  
ル



ラベンダーの咲いてこの旅大団円

妹や生れ故郷は青時雨



幌  
尻  
岳  
の  
カ  
ー  
ル  
一  
面  
稚  
児  
車

駿  
府  
城  
堀  
に  
確  
か  
に  
翡  
翠  
が



倦  
き  
る  
ほ  
ど  
歩  
き  
汗  
し  
て  
ト  
ム  
ラ  
ウ  
シ

昏  
れ  
な  
づ  
む  
雪  
溪  
上  
に  
熊  
の  
影



十二湖へ向かふ道のべ豊の秋

秋気満つ白神ラインは九十九折



ポ  
ケ  
ツ  
ト  
の  
団  
栗  
だ  
い  
じ  
小  
さ  
な  
手

五  
能  
線  
水  
平  
線  
に  
沈  
む  
秋



電飾を重たげにして枯銀杏

秋の蝶追ひつけさうで追ひつけず



枯葉降るC  
イースト  
ウッドの  
後ろ姿

愛犬も  
家族の  
一人  
賀状書く



山  
笑  
ふ  
寸  
又  
峡  
温  
泉  
眠  
た  
げ  
に

山  
茶  
花  
の  
こ  
ぼ  
れ  
る  
ま  
ま  
に  
無  
人  
駅



初旅はスフィンクスに逢ひにゆく

ヨチヨチの子を目で追へばいぬふぐり



対  
岸  
の  
駱  
駝  
の  
親  
子  
冬  
青  
空

星  
冴  
ゆる  
ア  
ザ  
ー  
ン  
の  
声  
で  
目  
醒  
め  
た  
り



日脚伸ぶ畳の部屋のおもちや箱

一月のアップ・シンベルに立ち尽す



山  
笑  
ふ  
寸  
又  
峡  
温  
泉  
眠  
た  
げ  
に

観  
梅  
を  
へ  
そ  
ま  
ん  
じ  
ゆう  
で  
終  
り  
け  
り



この宇宙のひとりとなりし聖五月

久能山千百段に花ふぶき



聖五月小さき手見つつ戦あるな

母眠れ子も眠らせよ山法師



青  
嵐  
鈴  
懸  
の  
鈴  
落  
と  
し  
け  
り

草  
餅  
や  
投  
票  
立  
会  
入  
見  
知  
り  
顔



まだ上手く下駄はけなくて浴衣の子

目を閉じて汗うつすらと乳呑む子



噴煙も涼しく見えて十勝岳

羊蹄山の森林限界岩袋



涼  
風  
や  
只  
ひ  
た  
す  
ら  
に  
百  
の  
山

縁  
側  
に  
ブ  
リ  
キ  
の  
玩  
具  
日  
向  
水



熱熱に干されし梅を裏返す

下山せし光岳より虹の橋



瀬戸の海雑魚釣りあげて天高し

道後の湯漱石の間の秋めける



世話好きの長女の白髪菊日和

青年はバイクで遍路秋初め





3

2008 ~ 2008

銀杏や女性市長を選んだ日

秘  
境  
め  
く  
観  
音  
沼  
の  
深  
紅  
葉



東  
海  
道  
五  
十  
三  
次  
石  
路  
日  
和

山  
歩  
き  
な  
が  
ら  
十  
二  
月  
八  
日  
暮  
れ



雪纏ひ雲這はせたる今日の富士

水色のこの惑星に春の雪



枯  
石  
路  
に  
波  
の  
砕  
け  
て  
城  
ヶ  
崎

日  
の  
当  
た  
る  
岩  
に  
張  
り  
付  
く  
冬  
の  
虻



鉄  
瓶  
の  
滾  
り  
て  
閑  
か  
針  
供  
養

稲  
取  
の  
大  
正  
か  
ら  
の  
吊  
る  
し  
雛



春  
き  
ざ  
す  
手  
術  
の  
姉  
の  
笑  
顔  
か  
な

車  
の  
子  
い  
ま  
だ  
帰  
ら  
ず  
春  
の  
雪



花  
衣  
指  
の  
先  
ま  
で  
さ  
く  
ら  
い  
ろ

病  
院  
の  
パ  
ジ  
ヤ  
マ  
姿  
も  
春  
の  
色



パ  
ソ  
コ  
ン  
と  
飾  
兜  
が  
並  
び  
け  
り

ゆ  
っ  
く  
り  
と  
歩  
き  
な  
さ  
い  
と  
山  
法  
師



母の日や子に祝はれて母恋し

芝桜真正面に武甲山



葉ざくちやペルーへ向ふ粗衣のまま

マチユピチュに雨期の終りの二重虹



朝焼の空に近づくチチカカ湖

阿国忌やマチユピチユ村で誕生日



清々とむしかり咲けり鬼無里かな

ウロス島瞳輝く子ら裸足



谷  
空  
木  
百  
体  
観  
音  
塩  
の  
道

一  
病  
を  
持  
っ  
て  
集  
ひ  
し  
夏  
半  
ば



大川の夜風に乗って盆太鼓

佃島無縁仏も踊の輪

田の色の豊かに変はる九月かな

雷鳴を遠くに聞きつ髪染める



上  
野  
よ  
り  
鶯  
谷  
へ  
秋  
日  
傘

所  
沢  
二  
分  
歩  
け  
ば  
虫  
す  
だ  
く



耐へがたき不況のあらし冬紅葉

思ひごと一時忘れ糸編む



ガザの地に硝煙消えず  
去年今年

日は西に六番札所  
実南天



笠雲をどっか  
と載せて冬の  
富士

神馬駆け秩父  
夜祭団子坂



出  
初  
式  
航  
空  
公  
園  
梯  
子  
立  
つ

侘  
助  
や  
景  
気  
変  
動  
追  
ひ  
付  
け  
ず



西伊豆の達磨山にも春の雪

振袖の車椅子押し成人式



お隣に赤ちゃんの声青木咲く

歩くとは人のことなり梅日和



初夏の山道五才に追ひ越され

母よりも長生きをして花吹雪



朴咲けり芭蕉と曾良の山寺に

夏草や源義の句碑仄暗し



三脚をぐつと伸ばして蓮の花

父の日や水族館にシユモクザメ



盆唄が隅田の川面流れ行く

片陰を伝ひて芭蕉稲荷かな



人生は冒険といふヨットの帆

葡萄棚金峰山は今日も雲捲けり



虫の声近くに聞いて髪染める

この国の変はる兆しや星の秋



故郷の山は豊かに茸狩

水引の細かな花の強かな



鶴  
の  
湯  
の  
白  
き  
湯  
溢  
る  
星  
月  
夜

あ  
つ  
あ  
つ  
の  
コ  
ロ  
ツ  
ケ  
食  
す  
美  
瑛  
は  
秋



冬  
日  
浴  
び  
千  
駄  
木  
の  
坂  
猫  
歩  
む

久  
々  
の  
姉  
妹  
に  
小  
春  
日  
和  
か  
な



一  
日  
を  
富  
士  
と  
歩  
か  
ん  
寒  
の  
晴

臘  
梅  
や  
好  
奇  
心  
こ  
そ  
余  
生  
な  
り



冬  
晴  
や  
愛  
宕  
神  
社  
に  
三  
角  
点

戦  
と  
は  
殺  
す  
こ  
と  
な  
り  
返  
り  
花



乗り継いで梅見の人となりけり

春寒しビデオテープの過去捨てる



佐保姫の降りたるところ角田山

辛淑玉や樹々には重し春の雪



春  
岬  
佐  
渡  
へ  
対  
っ  
て  
山  
下  
る

へ  
ル  
パ  
ー  
の  
仕  
事  
を  
終  
へ  
て  
花  
見  
か  
な

一  
本  
の  
薔  
薇

終





## あを叢書 1

著者 須賀敏子

発行日 2010年9月19日

発行人 佐藤喜孝

装丁 佐藤喜孝

発行所 竹僊房

〒164-0011 東京都中野区中央 2-50-3

電話 03-3371-4623

haisi@kagoya.net

### あを叢書について

二〇〇一年創刊の「あを」は今年で十周年を迎えました。これを記念してあを叢書とし電子出版することにいたしました。

この叢書はあを編集部のデータベースにある『あを』『飛行船』『獐』句会・吟行等のデータより作家各人が二百五十句抄出し発表年代順に一本にまとめたものです。